

選評

越前俊也

イサム・ノグチ《広島の亡き人々のための記念物》再考

本論文は、実現しなかったイサム・ノグチの原爆慰霊碑案《広島の亡き人々のための記念物》（広島メモリアル）をめぐる従来の説を、一次資料を詳細に分析、検討することで再検証した上で、あらためてノグチの制作意図を明らかにするものである。

筆者は、これまで、作者自身の記述から 1952 年春に委嘱されたとされてきた《広島メモリアル》が、1951 年中にはすでに模型が完成されていたことを明らかにし、ノグチが同時期に制作していた慶應義塾大学《萬來舎》と共通性があることを指摘した。また、そのことから、地上モニュメントと地下空間からなる《広島メモリアル》の基壇の方眼状の目地がエネルギーを示し、地上部がそのエネルギーの集中点であること、また他作品との比較からそのエネルギーが核エネルギーを示していることを明らかにした。

従来、作者の言によって、地上モニュメントのフォルムは「埴輪の屋根」に由来するとされてきたが、筆者は未発表の資料を分析し、作者が日本古代への関心と同時に「爆風キノコ」を想起させることを意図していたことを示した。それによってこの地上部が爆風キノコから発する核エネルギーと放射線を表す、すなわち原爆を想起させるものとなっていることを明らかにした意義は大きい。

筆者は、1952 年の計画案不採択から 1 年半の間に、ノグチが《広島メモリアル》の写真に掲載した 3 つの出版物を検討し、さらにイサム・ノグチ財団所有の模型を撮影したコンタクト・プリント 40 カットを詳細に分析、とりわけその照明の違いに注目して、地下空間の安置箱に刻まれた人型を、天窓からの太陽光が映し出すことで、原爆によって影のみを残して亡くなった人々を表す意図があったことを示した。天窓からの光が、時間によって、あるいは季節によって動くことで、地下空間に「儂い光が闇に差す瞑想的な空間」と「強い光が惨事の瞬間を想起させる暗喩的な空間」という両義的空間を作り出すという主張は刺激的で説得力がある。

さらに、筆者は、15 年後の 1968 年に発表された《広島メモリアル》の図版は、「瞑想」や「暗喩」で広島の亡き人々を追慕することから「転生」への願いを視覚化したノグチの作品として成就したと結論づけている。

このように、本論文は、従来の説を批判的に検討し、同時代の資料を詳細に分析、考察して、本作品をめぐる様々な事実を明らかにした。また、そうした事実を踏まえ、ノグチの知られざる制作意図を明らかにした意義は大きい。さらに、たんに実現しなかった作品プランを示す資料としてではなく、その写真図版そのものがノグチの作品であるとした結論も、刺激的で意義深く、美術史研究に資するものであろう。

以上の理由により、越前俊也氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称えるものとする。